

林文中舞踊団 WCdance

2008年、林文中により創設。『スモール』（2008）、『スモール・ソング』（2009）などでアジアと西欧のダンス技法を使いながら、純粋な動きの中に人間性を描くダンスの本質と可能性を探求している。この両作品はニューヨークのパフォーミング・アーツ表現者連盟（APAP）によって招待され、「バレエ・ダンス・マガジン賞」を受賞。2011年にはモダン・ダンスと伝統音楽を融合させた『小南管』を発表、伝統音楽を見事に再生させたと評された。2011年にアヴィニョン演劇祭、2012年にフェスティバル・トーキョーでも公演された。WCdanceのダンスは、伝統的な要素をモダン・ダンスと結びつけて、日常性の中の芸術の価値と言語や地域を超えた普遍性について再考させる力に満ちている。

林文中 LIN,WEN-CHUNG

台北芸術大學を卒業後、ユタ大学大学院修了。1991年より台北民族舞団（91-94）、舞蹈空間（96-97）、Repertory Dance eatrein Utah（93）、Bill T. Jones / Arnie Zane dance Company in New York（01-07）などに所属して、台湾、香港、ユタ、ニューヨークなどで広く活動している。2008年より台北で林文中舞踊団WCdance を主宰。

主催：大阪大学文学研究科アート・フェスティバル人材育成事業
〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭 II
助成：平成 26 年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」
「劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業」
連携：兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）
企画・運営：アート・フェスティバル人材育成事業
「伝統芸術の現代化」企画・運営委員会



林文中舞踊団 WC dance

小南管 II

small nanguan II

CHOREOGRAPHER

林文中

DANCERS

李姿穎 / 黎偉翰 / 蔡雅婷

MUSICIANS

黃俊利 / 林雅嵐 / 魏美惠

陳彥希 / 李世揚

TOURING CREW

陳逸君

STAGE MANAGER/ TECHNICAL DIRECTOR

陳建宇

PRODUCTION MANAGER

蔡筱婷

平成 26 年 11 月 30 日（日）

13 時 30 分開場 / 14 時開演

兵庫県立尼崎青少年創造劇場

（字幕翻訳：黄資絜）

同日開催（終演後）

セミナー「伝統芸術の現代化」

林文中（WC dance）

井口淳子（大阪音楽大学音楽学教授）

永田靖（大阪大学文学研究科教授）

（通訳：鄭蓓蒂）

林文中舞踊団『小南管Ⅱ』について

この度は、林文中舞踊団 WCdance『小南管Ⅱ』公演にお運び下さりましてありがとうございます。大阪大学文学研究科では、昨年に引き続き、文化庁「大学を活用する文化芸術推進事業」により「劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業（声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声）芸術祭」を開催しております。本日のこの舞踊公演は、この育成事業の一環で開催するものです。以下、簡単に舞踊団や作品について紹介させていただきます。

■林文中舞踊団と台湾の現代舞踊について

林文中舞踊団は、2008年に振付家林文中によって創設された舞踊団です。この舞踊団は、創設時より国内はもとより、国際的な場でも活発に活躍しています。2012年には日本の国際的な演劇祭の一つである「F/T フェスティバル・トーキョー」にも招聘され、今回の作品の前作にあたる『小南管』を上演し、好評を博しております。

台湾は、第二次世界大戦終戦時に日本による統治が終了した後、中国の国民党による政権のもと、1948年に成立した中華人民共和国とアメリカ合衆国の東アジア政策との緊張関係の中で、すぐれた諸芸術を生んできました。舞踊においても1970年代当初に、林懐民による雲門舞集 Cloud Gate Dance Theatre が創設されると、甚大な影響力を発揮し、次々と新しい舞踊の動きを生み出して行きます。それら多くの舞踊団は、西欧の舞踊技法を取り入れるだけでなく、中国やアジアの要素を織り交ぜて、舞踊による台湾らしさを追求して行きます。この西欧の舞踊技法と中国文化的な要素の混在が、台湾の現代舞踊を方向付けていると言っても過言ではありません。

1980年代から1990年代にはさらに台湾

の土着的な舞踊の伝統を重んじて、それらの舞踊をよりよく生かす試みも増えて行きます。台北民族舞団（1988～）や舞蹈空間（1989～）などは、アプローチは異なりますが、台湾の現存する種族の伝統的な舞踊や宗教的な儀礼をもとにして舞踊の創作を行い始めます。林文中は、当初はこれらの1980年代の台湾の土着性に眼差しを向けた舞踊団にかかわり、伝統と現代の対話を、その舞踊を通じて行って来たと言ってもいいでしょう。今回上演される『小南管Ⅱ』もそういった台湾の伝統を西欧的なダンス技法と結び合わせることで、どこにもない台湾らしさを表現しようとしていると言えます。

今回の作品『小南管Ⅱ』（2013）では、その台湾らしさとは、何と言っても「南管」音楽によって遺憾無く発揮されています。「南管」とは、中国の福建省や台湾に伝わる伝統的な音楽、また梨園戯と呼ばれる伝統的な演劇のことを指します。この作品でも、その演劇である梨園戯『朱文走鬼』や『高文举』などからの引用があるとのことですが、全体には南管音楽が随所に使われているのが、最大の特徴と言えます。

■言葉の舞踊

この作品は台湾の伝統を現代化しているという点で、80年代以降の台湾現代舞踊の流れの中に位置づけられると言えますが、同時にそれらにはないユニークな面を持つ、際立って実験的な作品でもあります。というのも、この作品ではダンサーが南管を歌い、南管奏者もダンスに参加しているからです。前作である『小南管』（2011）もすばらしい完成度を持った作品でしたが、ここでは基本的に南管奏者とダンサーたちは、ちょうど能の地謡とシテワキのように、完全に役割を分けられていました。ところが、今回の『小南管Ⅱ』ではこの両者の境目がなく、皆歌い、皆踊ります。ちょうどこの作品で南管音楽と現代舞踊が隔てなく溶け合っているかのようです。ここには伝統が現代の若い身体を通過して、現代のものとして生き直して行く一つのあり方が示されています。

この作品をユニークなものにしているもう一つの理由は、舞踊作品にしては言葉の占める割合が極めて高いということです。普通、現代舞踊は言葉を持たず、身体の技法と音楽によって表現されています。ところがこの作品では歌が頻繁に歌われ、また演劇のようにディアローグが交わされます。それらの言葉は具体的で、場面のテーマの意味合いが比較的明瞭に示されて行きます。またそれらの言葉が、原曲や劇の一部を換喩的に伝えており、全体としてみると、この作品の背後に、南管もしくは梨園戯とい

うジャンルの存在を感知させてくれます。この点で、この作品は南管を現代化しているように見えますが、実は逆で、現代舞踊が南管という一種のジャンルの中に取り込まれてしまっているのかも知れません。

ここで使われる言葉が、ほとんどの場合、南管や梨園戯の言葉である古い泉州語や古い台湾語であることから、それは分かります。それらは現代の台湾の日常で使われる言葉から遠く、理解さえ困難な言葉であるようです。そこでは若いダンサーたちとその言葉の間には距離が生じ、相互にアイロニーを生んでいるはずですが、つまり、南管の歌詞の内容（しばしば男女の性愛への渴望や、愛を成就することの困難さを歌っています）が、そのものとしてではなく、現代的な意識のもとで捉え返されています。そこでは時代を超えた愛の様々な形が描かれていますが、その真の自由さを阻害する諸力（時代の先入観、価値観など）に対して批判的な意識を感じることができます。同時に、それらの愛の自由なあり方もまた、実は南管という壮大な想像力の世界によって宙づりにされてしまっていることを示しているように見えます。作品が最終的に、ただ単に愛の自由を明るく描くのではなく、全体として何とは言えず人を不安にさせるような不思議な触感があるとすれば、それはその「ジャンルによる宙づり」のためだと考えられます。

（永田靖 / 演劇学・大阪大学）